

日明勘合貿易に於ける輸出品としての 刀劔について

虎 頭 民 雄

足利義満が応永八年（一四〇一）肥富某等を明に遣わしてより、天文十六年（一五四七）策彦の渡航に終るまで約百五十年間に於いて、明に使を遣わすこと拾九回、明使の来朝すること拾回到及び、その間に使用せられた勘合符は永樂・宣德・景泰・成化・弘治・正徳の六種であつて、勘合貿易船は八十八隻に及んでいる。

この間に於ける日本よりの輸出品としては、武器刀劔類・硫黄・銅・扇・馬・蘇木・美術品等があり、彼の地より輸入されたものとしては、銅錢・銀・絹布類・書籍類・藥品等があつた。今この内日本よりの重要輸出品である刀劔について述べてみたいと思う。

しかし応永八年（一四〇一）から応永廿六年（一四一九）に至る八回は充分な史料がない故、こゝでは永享四年（一四三二）より天文十六年（一五四七）に至る拾一回の貿易について述べることにする。

輸出品の首位を占めた日本刀の価格の決定に當つては彼我の間に屢々紛議を招き、国交断絶の危機に瀕したことをさへあつた。

国王進献物に於ける刀劍武器については、永享四年（一四三二）以後は撒金太刀二把・槍一百把・長刀一百柄・黒漆鞘柄太刀一百把・鎧一両に一定したようで、天文十六年（一五四七）の渡航準備のために出した「天文十二年後渡唐方進貢物諸色注文」には

一 龍御太刀二振事

一 御進物太刀百振事

一 長太刀百枝事

一 鎧百本事

とあり、国王進献物の太刀等は前後を通じて変化がなかつたものと思われ、これらの武器の形態模様なども略一定し、前述の書にはそれ／＼の詳細な記述が見えている。これらの刀劍は渡唐の度に新調したようで、寛正六年（一四六五）に於いては鎧は土岐氏が進上したが、太刀・槍・長刀は四條井上善長の作であり、又撒金鞘太刀即ち所謂龍太刀はその細工に手数を要し、刀身は「二腰実三貫文宛信国作之」であつたが、鞘柄には廿三貫八百五十文を要し「藤左衛門攝津守方中間」が作製し裝飾的なものであつた（戊子入明記）。

国王附搭物並に使臣自進物の太刀についてみると、その数はそれ／＼制限があつたが、勿論この規定は嚴密に実行されないで、常に限界を越える有様であつた。その原因は後に述べるように刀劍の輸出が非常な利益をあげたことは云うまでもないが、その上刀劍はすべて明政府で買上げ一般人との取引を禁じたことは（臥雲日件錄長祿二年正月八日條）、かの地に輸出さえすれば商品を消化しうることを得たからである。

次に秋山謙藏氏の表をかりげてこれについて述べてみよう。

年次	出 発 の 年	刀 劍 の 数	一 把 の 価	総 額
1	永享 四 一四三二	三〇〇〇把	一・〇〇〇〇文	三〇〇〇〇貫文
2	永享 六 一四三四	三〇〇〇	一・〇〇〇〇	三〇〇〇〇
3	宝徳 三 一四五一	九九六八	五〇〇〇	四九八四〇
4	寛正 六 一四六五	三〇〇〇〇余	三〇〇〇	九〇〇〇〇
5	文明 八 一四七六	七〇〇〇余	三〇〇〇	二一〇〇〇
6	文明 一五 一四八三	三七〇〇〇余	三〇〇〇	一一一〇〇〇
7	明応 二 一四九三	七〇〇〇	一八〇〇	一二六〇〇
8	永正 六 一五〇九	七〇〇〇	一八〇〇	一二六〇〇
10	天文 八 一五三九	二四一五二	一〇〇〇	二四一五二

A. 第一次（永享四年）・第二次（永享六年）・第三次（宝徳三年）

第一次第二次の三千把は続善隣国宝記（成化二十一年二月十五日付明主諭足利義政）に「照宣徳間事例。各様刀劍総不過三千把。」により、第三次の九九六八把は西忍の記録（大乘院日記目録享徳二年十二月條）により、その価格の十貫文・五貫文は鹿苑日録明応八年八月六日條・臥雲日件録長祿二年正月八日條の記事によるものである。

しかし第一次と第三次はいさゝか趣を異にしている。

輸出品の給価に關して皇明英宗実録附録五十四景泰四年（一四五三享徳二年）十二月甲申の條に宣徳八年（一四三三永

享五年)の給価の状況が述べられている。

表にして示すと次の如くである。

宣 德 八 年 の 例			
蘇 木	每 斤	1,000	文
硫 黄	〃	1,000	
紅 銅	〃	300	
刀 劍	每 把	10,000	
槍	每 條	3,000	
扇	每 把	300	
火 筋	每 双	300	
扶金銅鈔	每 個	6,000	
花 硯	〃	500	
小 帶 刀	每 把	500	
印花鹿皮	每 張	500	
器 皿	每 個	800	
硯 匣 等	每 副	2,000	
折支絹布	每 疋	100,000	
折 支 布	〃	50,000	

尙宣德八年と景泰四年の量は次の如くであつた。

					宣 德 八 年 (一四三三)		景 泰 四 年 (一四五三)	
腰	刀	三〇五〇〃	九四八三〃					
長	刀	二把	四一七把					
生	紅 銅	四三〇〇〃	一五二〇〇〃					
蘇	木	一〇六〇〇〃	一〇六〇〇〃					
硫	黄	一二〇〇〇斤	三六四四〇〇斤					

景泰四年の給価		
生紅銅	毎斤	銀6分→銀6分
蘇木(大)	〃	銀8分
〃(小)	〃	銀5分
硫黄(熟)	〃	銀5分
〃(生)	〃	銀3分
刀 劍	毎把	6,000文
槍	毎條	2,000
扶金銅銚	毎個	4,000
漆器皿	〃	600
硯 匣	毎副	1,500
支給額		
絹		229疋
布		459疋
銅 錢		50118貫文

以上の表によつて第一次・第三次の刀劍の数量及び価格を示すと次のようになる。

總額	槍	長刀	腰刀	第一次		第三次	
				数	価	数	価
三〇五二〇貫文	?	二	三〇五〇		一〇、〇〇〇文	九四八三	六、〇〇〇文
					一〇、〇〇〇	四一七	六、〇〇〇
					三、〇〇〇	五一	二、〇〇〇
五九五〇二貫文							

第一次は大体異同がないが第三次の給価については大いに異なる。本数に於いては西忍の記録（太刀九千五百張・長刀四百十七張・ヤリ五十一）に比べると太刀が十七把減ただけで、長刀及び槍の本数は正しく一致する。しかし槍の給価と刀劍の給価は同一でないのであつて、且刀劍の価格は礼部の規定では六貫文であつて五貫文ではなかつた。

尙第二次は大体三千把であつたろうが、その中の八百把は將軍の商売物であつたことは戊子入明記に見えるところである。

しかしこゝで問題になるのは臥雲日件録長祿二年正月八日の條に見える「就中五万貫蓋太刀之報也」の五万貫である。前にかゝげた秋山氏の表では四九八四〇貫文となり五万貫に近いものとなるが、實際の総額は五九五〇二貫文となり臥雲日件録の五万貫と矛盾することである。

しかし實際に於いてこの価格に相当するものが悉く銅錢を以て支給されたとみるのは早計であつて、絹布を以て折支したことを見逃してはならない。即ち後に述べるように絹一疋を百貫文、布一疋を五十貫文として計算したものでこの割合は前後を通じて変化はなかつたと思われる。

さて第三次に於ける給価を綜合して示すと次の様になる。

	絹	布	銅 錢	計
数	二二九疋	四五九疋	—	—
一疋の価	一〇〇貫文	五〇貫文	—	—
貫 高	二二九〇〇貫文	二二九五〇貫文	五〇一一八貫文	九五九六八貫文

硫黄銅	三四七九〇貫文
刀・槍	五九五〇二
硯匣等	一六七六
計	九五九六八

故にこの時受取つた約五万貫の銅錢は貿易品すべてに対する給価の一部であつて、太刀だけへの銅錢は五万貫にはるか

に及ばないものであつたとしなければならぬ。刀劍が輸出品の最高を占めていたので、支給の銅錢五万貫を太刀の給価とし、これより計算して臥雲日件録では一把五貫文としたものであろう。このことは同書に「一万貫硫黄之報也」とあり、時の正使允澎に賜つた特賜の一万貫を硫黄の代としているのと軌を一にするものである。

以上によつて考えると、貿易品の給価の総高を以て直にそれだけの銅錢が輸入されたとするのは早計であつて、明はなるべく絹布を以て折支しようとし、我は銅錢を以てせんことを願い、ために銅錢を彼に求むること切なるものがあつたのである。

B. 第四次（寛正六年）・第五次（文明八年）・第六次（文明十五年）

壬申入明記に「成化五年（文明元年）進納三万余把。十四年（文明十年）進納七千余把十九年（文明十五年）進納三万七千把（中略）每把賜旧錢三千文」とあり秋山氏の表の通りである。

しかし三千文が悉く銅錢であつたかどうかは疑わしく「大明会典（禮部七十一）給賜四」に弘治年間の規定として「腰刀每把三貫」

とし「日本国附進刀劍每把鈔三貫内一分与錢九分支絹每鈔一百貫該絹一疋」とあり、弘治年間第七次（明応二年）でその時は三貫文ではなかつたが、之は第六次の給価を基として規定したと思われる。即ち総額の十分の一だけが銅錢で支給され、絹一疋が百貫文と換算されていた。故に三貫文と云つても錢三貫文ではなくて、それだけの価値の物を支給したとみてよい。

尙第四次には將軍の商売物として太刀五百腰槍長刀四十枝が含まれていた。（戊子入明記）。

C. 第七次（明応二年）

壬申入明記に「弘治八年（明成化四年）收刀七千。每把賜旧錢一千八百者。此是當時使臣壽寔等。犯罪科於濟寧也」とあり、秋山氏の表は直ちにこれを以て総高が出されている。

しかし事實は使節の一行の或る者が「至濟寧州夷衆有持刃殺人」（皇明孝宗實錄弘治九年八月庚辰條）するに至り、「弘治八年收國王附搭刀劍五千把使臣自進腰刀俱是每一把賜同前一千八百文。弘治九年正使壽寔愁訴進收二千把每一把賜三百文」（壬申入明記）と云うことになり、七千把の中五千把は千八百文、二千把は三千文であつたのである。

計	第七次			總高
	把	數	一把の價	
		五〇〇〇余	一八〇〇文	九〇〇〇貫文余
		二〇〇〇余	三〇〇文	六〇〇貫文余
		七〇〇〇余	—	九六〇〇貫文余

D. 第八次（永正六年）

この貿易に於いては刀劍の価格決定について空前の紛擾を生じたが、その経緯については壬申入明記により察することが出来る。

正使桂悟等は刀劍約八千把を携行したが、之は國王附搭物の七千把、使臣自進物の九百八十把を含むもので、明は永享條約で定められた附搭太刀三千把を固守し、七千把中の三千把だけを收買し、一把の價三百文とのことで桂悟等は大いに心痛し「憂愁百結。醬水不能下咽。其可奈何哉。悟等固雖小邦草芥。惟国法刑戮大嚴。是畏若不復旧例而販国則人可受誅戮也」（異国出契永正九年五月二十日條）と哀訴したが、その理由は宋素卿の細川第四号船が桂悟等より先立つて寧波に來り、刀價每把三百文を以て取引を行い歸国したためで之に對して桂悟等は「宋素卿為大國之人。我王愛之。而素卿与王

倖臣最厚。共密謀裝一隻船号四号船。易其姓曰宋。為日本人潛身。自間道涉南海來朝。全非出於國王之誠意。豈可以為例乎」と奏上し、一把千八百文として給価されんことを要求し、若し聽かなければ彼我國交断絶し「他日海寇聞風復集其罪誰当」と威し、「三千刀価則一文不敢收洋々而去」と強硬な談判をつづけたので、明もついにこの要求を入れて「收附搭未進四千把并使臣自進。其価照依弘治年間例支行」ということになつて、全部を買上げることと桂悟等は「歛喜如再生。不知手舞足蹈」の有様であつた。

所が「弘治年間例」について明は「捨弘治八年季一千八百文例。止用弘治九年三百文」との見解であつた。これに対し桂悟等は再び談判に及び、弘治九年の例は「日本人於濟寧生事之罪矣」であり「今次使臣有何罪。欲擬弘治年罪犯之輩也歟」としてついに「然万一新例不改。賞賜不復旧則敝邦貢事一切絶于此時也。抑洪武以来進貢者幾番。奉使者幾人今日悟等何人薄福奉節入朝。逢此時運。迷惑之極。進退惟谷。如桂悟光堯何面目可見國王哉。決留殘骸於大國之地。與草露俱銷。可示孤忠。其他六百余人一任彼進退」と最後通牒を發するに至つた。

この要求が貫徹されたであろうことは、明史日本伝に「附進方物皆予全直母阻遠人向化心」とあり、又皇明武宗実錄正徳七年二月癸卯の條に「附進方物亦給全価毋遠人效順之意」とあることによつて知りうる。かくて七九八〇把の太刀は千八百文を支給されたのである。

種 類	数	一把の価	總 額
國王限搭物	七〇〇〇把	一八〇〇文	一二六〇〇貫文
使臣自進物	九八〇	一八〇〇文	一七六四貫文
計	七九八〇	一	一四三六四貫文

E. 第九次（大永三年）

この時は寧波に於いて日本人同志の流血事件があり、徴すべき史料がないが、刀劍の価値は次第に下落しつつあつたとみるべきである。

F. 第十次（天文八年）第十一次（天文十六年）

第十次の刀劍数は「下行価銀帳并駄程録」に次の如く示されている。

	一号船	二号船	三号船	計	總計
国王附搭物	一二九五四	五八七五	五三二三	二四一五二	二四八六二
使臣自進物	二九〇	一六〇	二六〇	七一〇	

秋山氏の表では使臣自進物の太刀がのせられていない。この時の価格はいかほどであつたか分らないが、次の第十一次のは每把一貫文であつたことは明らかであるから（大明譜）第十次も一貫文であつたろうと思われる。

第十一次の刀劍数は不明であるが、やはり夥しい数量に上つたものと思われる。

次に太刀一把の原価と彼の地に於ける給価とを比較してみよう。

年次	原価	出典	給価	利率
第二次（永享 六）	一、〇〇〇文	戊子入明記	一〇、〇〇〇文	一〇倍
第三次（宝徳 三）	一、〇〇〇文 八〇〇〇文	臥雲日件録長祿二正八	六、〇〇〇文	六一七倍
第六次（文明 十五）	八〇〇文	親長卿記文明十五三六	三、〇〇〇文	約四倍

右の表によつて刀劍の輸出が非常に利益のあつたことが分るが、明の給価が次第に減少の過程を取つたことは注目すべきであつて、その原因は輸出の過剰によることは勿論であるが、その品質が次第に低下したことも原因の一つであつた。これらの太刀は輸出向の新作と思われ、数打による太刀が粗悪に流れることは、国内に於ける需要の増加とともにさげがたいことであつた。

「籌海図編」に上等の太刀として上庫刀、次等の太刀として備前刀をあげているが、日明間に於いて取引されたのは次等の備前刀がその大部分を占めていたことと思われる。

然らば最後に何故このように多数の太刀が輸出されたかの問題がある。

わが国から見れば利益の大である太刀を制限数を越えて輸出したのは当然であるが、明に於いて屢々紛議を生じてまでも、すべてを官に於いて買上げたのは何故であつたろうか。一般人との取引の禁止は、武器として使用されることを恐れるためであるが、官に於いて買上げた原因としてまず考えられることは、賞賚用としてであるが、それだけならば少数の立派な太刀を購入すれば充分である。

私は太刀は腰刀の名をもつて明よりの頒賜物として、広く日本以外の東洋諸国にもたらされたと考えたい。明より他の諸国への頒賜物中に刀劍が含まれていたとの明文はないがしかし当時における琉球が南海諸国即ちシヤム・マラツカ・スマトラ等との交易にあたり、腰刀が重要な取引品であつたことは（註参照）、日本と直接交渉のない国々に於いては、日本刀が珍重されていたことと思われ、明がこれらの国々に与えたであろうことは推測しうると思う。しかも刀劍の数が多いと云つても、日本よりの貿易は大体十年に一度で、一万本としても年に千本、充分にこれを消化し得たと考えるものである。故に日明の貿易も広く東洋全体の上から考えられなければならないと思う。

〔註〕

琉球外交文書「歷代宝案」によれば、シヤム・マラッカ・ジャワ・スマトラ・旧港（バレンバン）安南宛への琉球国王咨文の中には、腰刀十把内外が使船の度毎におくられていた。

安南国への咨文（正徳四年十月九日付）には、

金結束金龍靶黒漆鞘腰刀式把

金結束兼鍍金事件腰刀陸把

鍍金結束螺鈿靶紅漆鞘袞刀式把

鍍金銅結束螺鈿靶黒漆鎗式把

とあり、日本刀が珍重されていたと云つてもその中身ではなくて、その外部の裝飾に重きおかれていたのである。

（一九五一、九、三〇記）